

武蔵野日曜集会

神の撰び

――ローマ書第9章6～24節――

1978年9月10日(武蔵野)

小池辰雄

非連続の連続 神さまの選び 嫉妬神 ドラマチックな構造 われ憐れまんとする者をあわれむ 神のろくろはこの壺を造った 天公本より我を知る 地獄は当然のところ 恵みの選び

【ロマ9:6～24】

6 それ神の言は廃れたるに非ず、イスラエルより出づる者みなイスラエルなるに非ず、7 また彼等はアブラハムの裔なればとて皆その子たるに非ず、『イスラキより出づる者は、なんじの裔と称えらるべし』とあり。8 即ち肉の子らは神の子らにあらず、ただ約束の子等のみ其の裔と認めらるるなり。9 約束の御言は是なり、曰く『時ふたび巡り来らば、我きたりてサラに男子あらんと。10 然のみならず、レベカも我らの先祖イサク一人によりて孕りたる時、11 その子いまだ生まれず、善も悪もなきぬ間に神の選の御旨は動かず、12 行為によらで召す者によらん為に『兄は次弟に事うべし』と、レベカに宣給えり。13 『われヤコブを愛しエサウを憎めり』と録されたる如し。

14 然らば何をか言わん、神には不義あるか、決して然らず。15 モーセに言い給う『われ憐れまんとする者をあわれみ、慈悲を施さんとする者に慈悲を施すべし』と。16 然れば欲する者にも由らず、走る者にも由らず、ただ憐みたる神に由るなり。17 パロにつきて聖書に言い給う『わが汝を起したるは此の為なり、即ち我が能力を汝によりて顕し、且わが名の全世界に伝えられん為なり』と。18 されば神はその憐れまんと欲する者を憐み、その頑固にせんと欲する者を頑固にし給うなり。

19 然らば汝あるいは我に言わん『神なんぞなお人を咎め給うか、誰かその御定に悖る者あらん』20 ああ人よ、なんじ誰なれば神に言い逆うか、造られしもの、造りたる者に対して『なんじ何ぞ我を斯く造りし』と言うべきか。21 陶工は同じ土塊をもて此を貴きに用うる器とし、彼を賤しきに用うる器とするの権なからんや。22 もし神、怒をあらわし権力を示さんと思しつつも、なお大なる寛容をもて、滅亡に備れる怒の器を忍び、23 また光栄のために預じめ備え給いし憐憫の器に対して、その栄光の富を示さんと為給いしならば



如何に。²⁴ この憐憫の器は我等にしてユダヤ人の中よりのみならず、異邦人の中よりも召し給いしものなり。

●非連続の連続

⁶ それ神の言は廃れたるに非ず、イスラエルより出づる者みなイスラエルなるに非ず、

「イスラエル」とは、もちろんこれはヤコブのことです。十二支派がヤコブから出てきた。即ち血統的なイスラエルがイスラエルというわけではない。パウロはここで、イスラエルというものを肉的なイスラエルと、霊的なイスラエルと、二つ考えて言っている。血統ではなくて霊統が大事だと。霊統というのは始め頃から決まっていなかった。霊統は非連続の連続です。

⁷ また彼等はアブラハムの裔なればとて皆その子たるに非ず『イスラエルより出づる者は、なんじの裔と称えらるべし』とあり。

これは創世記21章12節に、

「¹² 神アブラハムに言いたまひけるは、童児のため又汝の婢のために之を憂るなかれ、サラが汝に言うところの言は悉く之を聴け、其はイスラエルより出づる者汝の裔と称えらるべければなり。」(創世記21・12)

とある。昔は血族結婚式なものもあるし、なかなか複雑怪奇です。要するに、サラが選ぶの妻で、ハガルの方ではない。また、それらの子のイサクとイシマエルのうち、選びはイサクだと。またそれから、イサクにエサウとヤコブの二人の兄弟が生まれて、ヤコブが選ばれた。サラはイサクを与えられたときに、そんなことがあるかと言って、与えられる時に笑ったというので、「イサク」というのは「笑ひ者」という意味です。イサクというのはサラの不信仰の名前なんです。神さまの言うことを受けとらなかった。

「アブラハムはエホバを信ず。エホバはこれを彼の義となしたまへり」

これは創世記15章に出ている。子供がないのに、空の星の如くなると、未だとても信じられないようなことを信じたというわけです。サラの別の名前はサライという。

この場合はそういった血統的なことではないと。イスラエルとは霊的イスラエルのことだとパウロは言おうとしている。

⁸ 即ち肉の子らは神の子らにあらず、

即ち、血統的な子らが、

「父が信仰があるから」

といって、息子に信仰があるというわけにはかかないと。信仰は各人が神さまとの対決においてなされることです。また個人においても、

「過去に信仰をもっていたから今もあるんだ」



なんてあぐらをかいていたら、とんでもない話。毎日が新たに信の世界に深く入っていく。信仰というのは個人ひとりの人においても非連続の連続です。

ただ約束の子等のみ其の裔と認めらるるなり。

さあ、困ったね、この「約束の子等」とは。アブラハムはサラにおいて与えられたイサク、その系統が、その裔が即ち「約束の子等」というわけです。イサクの系統です。神さまはそういうように先を見ている。けれども、約束の子らであつたつて、神さまはそのつもりでいても、今度はその中で脱落して来るのはいくらでもある。ただその中からまた非連続の連続で出てくる。即ち、神さまが約束しているのは、非連続の連続がそこにあるということを見ているわけで、ただ血統的に言つてらつしやるわけではない。そこは間違えないようにしてください。約束には非連続の連続がその方面にあるという。誰がそういうようになるか全然分からない。選びはある意味においては「予定」ということと連関してくる。それは「^{あらかじめ}預決め定め給いし者」とロマ書8章にも既に出ています。

まあ、人間なんてものは、これだけのことをしようなんて、予定したり計画したつて、完全にやったことなんかありはしない。予定以上にやったなんて、おそらくないでしょうね。とにかく、「予定」と言おうが「選び」と言おうが、人間の論理で片づいてしまうようなものではないんです。

●神さまの選び

9 約束の御言は是なり、曰く『時ふたび巡り来らば、我きたりてサラに男子あらん』と。

創世記18章の中に出てくる言葉です。

「^{あくるとし}その一人言う、明年の今頃我必ず汝に返るべし、汝の妻サラに男子あらん。サラその後なる天幕の入口にありて聞きいたり。……¹⁴エホバにあに為し難き事あらんや。時至らば我定めたる期に^{とき}汝に帰るべし。サラに男子あらんと。¹⁵サラ^{おそ}懼れたれば^{うけがわ}承ずして我は笑わずと言えり。エホバ言いたまいけるは否汝笑えるなり。」(創世記18・10～15)

そこで「笑い」という。「イサク」というのは「笑いの子、笑われ者」という。

¹⁰然のみならず、レベカも我らの先祖イサク一人によりて孕りたる時、¹¹その子いまだ生まれず、善も悪もなさぬ間に神の選の御旨は動かず、¹²行為^{おこない}によらで召す者によらん為に『兄は次弟に事^{おとうと}うべし』と、レベカに宣^{のたま}給えり。

¹³『われヤコブを愛しエサウを憎めり』と録^{しる}されたる如し。

イサクの妻がレベカです。ヤコブの妻がラケル。レベカにエサウとヤコブが生まれたが、兄さんの方が除けられて、弟のヤコブの方が選ばれた。マラキ書1章に出ています。

「²エホバ^{いい}曰たもう、我汝らを愛したり、然るに汝ら云う汝いかに我らを愛せ



しやと。エホバいう、エサウはヤコブの兄に非ずやされど我はヤコブを愛し、
3 エサウを惡^{にく}めり、且つわれ彼の山を荒らしその嗣業^{しぎよう}を山犬にあたえたり。」
(マラキ1:2～3)

神さまが愛したり憎んだり。およそ仏教で言ったら、

「こんなのは神さまの資格がない」

なんて、仏教ならそう言うでしょうね。

「憎愛なんていう概念はそもそもおかしい。そこから脱落しなくてはいいかん」

というのが仏教的なものだ。ところが、イスラエルの神さまはなかなか激しい。妬^{ねた}んだり。「妬みの神」なんだ。イスラエル人というのはそういう感情的に強いから。

『われヤコブを愛しエサウを憎めり』と録されり」

と。こんな言葉は蹟^{あと}くですよ。神さまがそう言つたと、マラキ書に書いてある。なぜ憎んだのですか、なぜ愛したのですか、なんていうことになる。まあしかし、相対的に見まして、エサウというのは割合に無難な男だけれども、本当に求めるものを求めない。また、相対的判断の心をもつた男です。ヤコブというやつは性格からいうと、少しがめついやつだ。しかし、これは大事なものを一生懸命で求める。

「天国は烈しく攻むる者、これを奪う」

というキリスト・イエスの言葉もありますけれども。そういう絶対的なもの、これはというものには打ち込んで求める。そういう性格がヤコブで、人間ヤコブが全面的にいいわけでも何でもないが、そこにヤコブに選^{えら}びがかかつてきたということは、ある程度言えると思います。選^{えら}びにもいろいろな場合がある。それから、全然ダメなやつを選^{えら}ぶ。またイスラエルの民は頑^こくなな民であるから選^{えら}んだ。神さまの選^{えら}び方にはいろいろあるので、こういうわけだから選^{えら}んだなんて、一面的なものではない。だから、我々は判断に苦しむ。判断に苦しむの^がいいわけで、判断できるような選^{えら}びだったら、神さまの選^{えら}びではないわけです。

「エホバ宣^{のたま}給^{たま}く、わが思^{おも}いはなんじらの思^{おも}いことなり、わが道はなんじらのみ

ちと異なれり」(イザヤ55・8)

とイザヤ書55章8節にある通りで、我々に理解できるような神さまは神さまではない。理解に苦しむような神が神なんです。分からないからいい、神らしいというような――非常に乱暴に言えばそのように――そいつを本当に信じかかつてゆくと、不思議なことが今度は起きて来る。

●嫉妬神

パウロは、13節まで読んだ通り、彼はイスラエルの血統から言うと、ベニヤミンの族の血統の人です。ベニヤミンの族だからパウロは選^{えら}ばれたのでも何でもない。たどつてみたら、



昔はベニヤミンだったと。

14 然らば何をか言わん、神には不義あるか、

そんな勝手な選び方をして、けしからんではないか、不公平ではないか、不義ではないかと。

決して然らず。15 モーセに言い給う『われ憐れむとする者をあわれみ、慈悲を施さんとする者に慈悲を施すべし』と。

これがまた躓きの言葉であつて、出エジプト記33章です。福音の世界は躓きなんですよ。大体、十字架が躓きなんです。だから、キリスト教にはなかなか入らない。これは楽なご利益宗教ではないから。

「17 エホバ、モーセに言いたまいけるは、汝が言えるこの事をも我為さん。汝はわが目の前に恩を得たればなり。我れ名をもて汝を知るなり。

お前の名をよく知っていると。ただ名前を知るということではない。名前において汝を知っている。

18 モーセ願くは汝の栄光を我に示し給えと言ひければ、

あなたの栄光を示してくださいと。

19 エホバ言いたまわく、我わが諸の善を汝の前に通らしめエホバの名を汝の前に宣べん。我は恵まんとする者を恵み、憐れまんとする者を憐れむなり。

20 又言いたまわく、汝はわが面を見ることあたわず、我を見て生くる人あらざればなり。

神さまと直に面接したらダメだと。

21 而してエホバ言いたまいけるは、視よ我が傍らに一つの処あり、汝磐の上に立つべし。22 わが栄光そこを過る時に我なんじを磐の穴にいれ、我が過る時にわが手をもて汝を蔽わん。23 而してわが手を除る時に汝わが背後を見るべし、わが面は見るべきにあらず。」(出エジプト33・17、23)

不思議なことが書いてあるね。なにさま、非常に具体的なんです。

「恵まんとする者を恵み、憐れまんとする者を憐れむ」

と。「憎まんとする者を憎む」とは書いてないけれども。

出エジプト記34章6節、

「6 エホバすなわち彼の前を過ぎて宣べたまわくエホバ、エホバ憐憫あり恩恵あり、怒ることの遅く恩恵と真実の大なる神、7 恩恵を千代までも施し、悪と過と罪とを赦す者、又罪すべき者を必ず赦すことをせず、父の罪を子に報い、子の子に報いて三四代におよぼす者。8 モーセ急ぎ地に身をかがめて拝し、9 言いけるは、エホバよ我もし汝の目の前に恩を得たらば願わくは主我等の中にいまして行きたまえ。是は項の強き民なればなり。我等の悪と罪を赦し我等を汝の所有となしたまえ。……14 汝は他の神を拝むべからず、そ



「はエホバはその名を嫉妬^{ねたみ}と^{ねたむ}言いて嫉妬神なればなり。」(出エジプト34・6～14)

「嫉妬神」とここに書いてある。お前たちを選んだ限りは、契約を結んだ限りは、約束をした限りは、お前たちをどこまでも民とする。だから、他の神々に行ったらとんでもないと。それだから、そういう熱愛の神のことを「嫉妬神」「エール・カンナー」という。

ちよつと矛盾しているように見えるでしょ。恩恵を何代にも続ける。悪い事をするとその罰が何代にも続くという。それでは、非連続の連続ではないではないですか。困ってしまうね。

「積善の家は余恵あり」

という言葉があるね。善を積む家には――「余恵」というのは余るところの恵みのこと――恵みがまた子々孫々に伝わっていくという。同じ思想なんです。結果がその子孫に及んでいく。善き原因が善き結果を生み、悪しき原因が悪しき結果を生む。そういうこともあるわけだ。そうかと言っていい気になっていたら、どっこいということにもなる。だから、真理にも、相対的な真理性と絶対的な真理性がありますからね。絶対的な真理性は何と言っても、非連続の連続の方です。エゼキエルがそのことを言っている。エゼキエル書18章20節、

「^{たましひ}20罪を犯せし靈魂は死ぬべし。子は父の悪を負わず、父は子の悪を負わざる

なり。義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰すべし。」

素晴らしい言葉です。だから、三代、四代及ぼすなんていうのはちよつとおかしいよ。聖書自身がある意味において矛盾している。

●ドラマチックな構造

だから、私は、ドラマチックだと言っている。私は、

「私を見るな。私なんか見たら蹟くぞ」

と言う。けれども、このようながラ、ク、タ、みたいなやつに、観念ではなくて、具体的に恩寵の事態が表れ、真理が迸って来るということは、私が観念でもって真理を語っているのではない。やはり、全人間小池という者のドラマチックな構造を通して神さまの真理が展開していく。そこを見るなら、私を見てもいい。

「先生はデ、タ、ラ、メ、みたいな男だけれども、そこに本当のものが展開していくことがおもしろい」

と。だから、その意味においてはじつと見る。観念でものを言っているのではないから。じつと見て、そして具体的に、

「我を見よ」

という場合、ペテロだって、パウロだって、聖人でも君子でもない。

「我は罪びとの首^{かしら}」



と言うパウロなんだ。そのパウロも、ペテロも、ヨハネも、「我を見よ」と言うのは、そう
いった、

「観念でものを言っているのではないぞ」

と。全存在でものを言っているわけです。それはこの者を通してキリストが表れる。だから、
「我を見よ」と言う。

しかしながら、そこが難しい。絶対矛盾の自己同一ということ。その我において、相対
的なものを見ているのではダメです。その我において絶対的なものが現れている。

「相対における絶対を見ろ。罪びとにおけるところのキリストを見よ」

と言うんです。そうやって来たら躓かない。そして、お互いに本当に信じていくことがで
きる――人間だから、躓いたり転んだりするよ、お互いさま。では、

「あれはダメではないか。信仰は大したことないではないか」

なんて、そういうことを言ったらダメです――それで、もの凄く、激しく求めていく。一
番大事なのはそこです。本願が成就していくその姿。何か知らんが、求めよりも更に上か
ら与えられている力の方が大事なんです、その光が、その栄光が。それでお互いに付き合
っていけば、「いやあ、素晴らしいなあ」ということですね。必ずそいつも捉みながら乗り
越えていく。

そういうような構造はなかなか説明しがたいが、もし説明すれば、ドラマチックな表現
をするよりか仕方がない。聖書はそういうようになっていく。だから、聖書は難しい。難
しいと言っても、頭で難しいのではない。その捉み方のコツが難しい。「こつちにはこう書
いてあって、あつちにはこう書いてあって、これは矛盾しているではないか。どうするん
ですか」なんて。矛盾だからいいんです。内村先生なんていう人もそういう人ですね。昨
日言ったことと、今日言ったことがまるで反対のことを言う。どっちが本当かと。どっち
も本当なんです。いわゆる「あれか、これか」ではない。「これも、あれも」です。「それ
は中心がないではないか」と。どつこい、そうではない。分かりますか。

●われ憐れまんとする者をあわれむ

「われ憐れまんとする者をあわれみ、慈悲を施さんとする者に慈悲を施すべし」

と。「さあ、それでは私は果たして憐れまれているんでしょうか。どうなんでしょうか」と
いう疑問を持ったり、心配したりする。

¹⁶ 然れば欲する者にも由らず、走る者にも由らず、

こつち側から人間が欲するということによって、神さまは決めるのではない。また、「走る」
というのは一生懸命で努力することです。努力精進するような、いわゆる実存なんていう
ものを見て、あれは立派だとか何とか言う、そういうことにもよらないと。

ただ憐れまともう神に由るなり。



これが絶対の世界です。だから、憐れまんとする者を憐れみ、顧みんとする者を顧みる。そうすると、みんな「弱ったなあ」と思うでしょ、果たして憐れまれるかどうかと。「憐れみたもう神による」というと――「神さまは誰でも憐れむ」と書いたら、みんな安心するんだよね――みんな心配になつてしまう。「困ったなあ」なんてね。

17 パロにつきて聖書に言い給う『わが汝を起したるは此の為なり、

パロなんていうやつは信仰も何もない。パロというのはエジプトの王さまの通称です。

即ち我が能力を汝によりて顕し、且わが名の全世界に伝えられん為なり』と。

出エジプト記9章16節に、

18 抑わが汝をたてたるは即ちなんじをしてわが権能を見さしめ、わが名を

全地に伝えんためなり。」(出エジプト9・16)

とある。パロを、あるときはアッシリヤの王さまを、あるときはバビロニアの王さまを選ぶわけです。そして、イスラエルを罰する。選びの内容にもいろいろあるわけだ。

18 されば神はその憐れまんと欲する者を憐れみ、その頑固にせんと欲する者を頑固にし給うなり。

これまたひどいね。憐れむだけならまだよかつたけれども、「頑固にする者を頑固にしたもう」と。これはどういうわけですかね。何をパウロは言おうとしているのか。イスラエル人はどうも生来、頑固な民、項強き民だ。思つたら百年目なんて。ドイツ人もそういうところがあるよ。それは、イスラエルの民はせっかく選ばれた選民なんだけれども、神さまに躓いて、神さまに対して不信、不義を犯している惨憺たる歴史なんです。ホセア書にある通り、宗教的姦淫を犯している。選んだけれども、いよいよ頑固にしてみました。ということは、それによつて神さまの選びが異邦人に及ぶ。神さまを知らない民に及ぶ。それはイザヤ書の中にそういう言葉がある。イザヤ書65章1節、

「我はわれを求めざりしものに問もとめられ、我をたずねざりしものに見出され、わが名をよばざりし国にわれ曰らく、われは此にあり我はここに在と。」

(イザヤ65・1)

即ち、本来イスラエルでない異邦人たち、求めてなかつた者、尋ねていなかった者に見いだされ、神さまの名を呼ばなかつた者に、「自分はここにいるよ」と言う。

我々もそうなんです。私もキリスト教は、「ヤソ教は」なんて言つていた。けなしたり、求めなかつた者が、

「主よ！ キリストよ！」

と。ついには、

「南無キリスト！」

と言うまでになつてしまった。そういうことになるという。

ずいぶん激しいですよ、その中身は。



「欲する者にもよらず、走る者にもよらず」

と。人間の側の自由意志だとか、そういうものによらない。

「憐れまんとする者を憐れみ、そして、選ばれざる者、また頑固にせられる者

あり」

と。「頑固にせられる者」とは無神論者です、「神さまなんか有るものか」と。傍若無神です。20世紀の今頃は、傍若無神に振る舞っている者がたくさんいるわけだ。唯物論者。いわゆる文明文化を謳歌している。人間の自主、人間の自由を手放しでもってやっている者。それから、全体主義的な者。これはみんな、20世紀の大方は頑固にされてしまっているわけだ。頑固にせんと欲する者を頑固にする。神さまなしの世界です。もう、自然科学的な真理ばかりが横行してしまつて、「一体、神なんかあるか」なんて、傍若無神になってしまつたと。大分危なくなつてきた。黙示録的なことになつてきた。

●神のろくろはこの壺を造つた

19 然らば汝あるいは我に言わん

ちゃんとパウロは分かっている、

『神なんぞなお人を咎め給うか、

憐れまんとする者を憐れみ、頑固にせんとする者を頑固にするなら、我々の方に責任はないではないか、なぜ咎めるのかと、そう言うだろうと。

誰かその御定に悖る者あらん』

御定に悖るわけにいかんのだ、神さまのことだから。だから、こつちは責任はないではないか、どうしてくれるんだと。

20 ああ人よ、なんじ誰なれば神に言い逆うか、造られしもの、造りたる者に
対して『なんじ何ぞ我を斯く造りし』と言うべきか。21 陶工は同じ土塊をも

て此を貴きに用うる器とし、彼を賤しきに用うる器とするの權なからんや。

陶工は便所の道具を造つたり、茶碗を造つたりする。同じ土塊がいろいろになるという。有名な「ラビ・ベン・エズラ」というブラウニングの詩があるね。第25節のところですよ。

「私が望めど、なり得ざりし一切

私の中にあるのに人々が無視したすべて

これぞ神に対する私の価値である。

神のろくろはこの壺を造つたのだ。」

「私がかつて在り得なかつた一切が、人々が私において侮蔑し蔑ろにし認めなかつた一切のもの、人がけなしたこの私が、これが私が神に対して価値があつたわ



けのものである。神さまのろくろに――陶工が形造っていくように――私はそのように神さまに形造られた。それが私が神に対して価値あるゆえんである。」

と。価値なきの価値ありという。徹底的に自分の側を、ダメなやつと人からけなされ、馬鹿にされ、だまされ、また自分はこうあろうとしたがそこまで行けなかった。それが私が神さまに価値ある所以である。神さまは私をどのように造ったと。だから、パウロは、「なぜ神さまに向かつて、器が陶工に対して、なぜこんなに造ったかと言えるか」と。これに対する一番素晴らしい答が、このブラウニングのこの詩句です。

「最悪は勇者にとつては最善である」

と。本当の勇者は、この勇氣、元氣はみんな上から来る。自分の空元氣ではダメなんです。いわば無者だよ、自分を何者ともしない。何者ともしない者を神さまは最も凄く使う。

そうすると、私はパウロの上を行こうと言う。頑固にされたことが、憐れまれないことが、逆説的に憐れまれる、本当に碎かれるその場なんです。顧みられざる顧みというものがある。憐れまざるところの憐れみがある。だから、神さまの憐れみは、神さまを信じぬく人には、一切に拘らず汝に対して「然り」と言う人には、最も凄く憐れみが来る。そうすると、このパウロの奥を――パウロはもちろんそこまで言っていると思いますけれども――言葉では出てないけれども、読むことができる。だから、選びとか、選ばれてないとか、その場合においてもまだ相対的なことです。絶対的なところに来ると、全部選ばれ、全部選びの器になる。全部憐れみの器になる。それはこっち側の神さまの受け方一つなんです。それに多少似たようなことがエレミヤの中に出てくる。エレミヤ記18章、

「エホバよりエレミヤにのぞめる言いう。²汝起て陶人の屋にくだれ。我かしこに於てわが言を汝に聞かしめんと。³われすなわち陶人の屋にくだり視るに輶轡をもて物をつくりおりしが、

ブラウニングは多分この辺を連想しながら書いた。

⁴その泥をもて造れるところの器、陶人の手のうちに傷ねたれば、彼その心のままに之をして別の器をつくれり。

神さまの方がそこねてしまった。やりそこないをやってしまった。そうしたら、別な器を造ったと書いてある。我々はどんなに神さまにやりそこないされても、今度は、やりそこないが恵みになる。即ち、御霊がやってくると、我々は別な器になる。我々が利口だとか馬鹿だとか、愛があるとかないとか、何とかかんとか、そんなものはみんな相対的な五十歩百歩のものであって、そこに御霊がやってくると、絶対的な質が入ってくる。別な器を造る。

できそこなだったっていいよ。私たちは本当にできそこないだ。もう、私は75歳、たくさんのできそこないをやってしまった。けれども、これからが本番だ。あとせいぜい10年か15年。まあ、90歳を過ぎたら果たしてどれだけできるかね。90まで私は相当やるつもりだ



けれども。もうボヤボヤしてられない。大事な時間は時間なんだ。

5時にエホバの言、我にのぞみていう。6エホバいう、イスラエルの家よこの陶人のなすが如くわれ汝になすことをえざるか。イスラエルの家よ、陶人の手に泥のあるごとく汝らはわが手にあり。7われ急に民あるいは国をぬくべし破るべし滅ぼすべしということあらんに、

そういうように自分が決めても、

8もし我がいいしところの国その悪を離れなば、我之に災を降さんとおもいしことを悔いん。

神さまも悔いるんだ、

9我また急に民あるいは国を立つべし植べしということあらんに、10もし其の国わが目に悪く見ゆるところの事を行わが声に遵わずば、我これに福祉を錫えんといひしことを悔いん。」(エレミヤ18・1～10)

それは幸いを与えようとしたことを、逆に悔いてダメにしてしまうぞと。私が言おうとしていることとちよつと違いますけれども。

神さまの御意なんて言つたつて、決まっついてそれでお終いなんていうものではない。こつち側の在り方でいくらでも変わつてしまふ。御意は変わらないんだよ、本当は。変わらないんだけど、現象面で変わつてくる。それでもなお、神さまは何とかして救おうとする。その御意は変わらない。けれども、審きはやつてくる。審きを超えてなお、憐れみがやつてくるでしょ。万人を救済せんとする神さまの本願は変わらないんだけど、神さまに逆らつて傍若無神だったならば、最後には黙示録みたいに第二の死というやつが来る。本地獄です。今のところは仮地獄だけれども、本地獄がくる。仮天国が本天国にあると同じように、そういうように、神さまの方でも非常にドラマチックにものを展開して行く。けれども、終局的において神を無みしたら、これはお終いですよ。

●天公本より我を知る

佐久間象山(1811～1864)の詩句に、

謗者任汝謗。(謗らん者にはその謗るに任す)

嗤者任汝嗤。(嗤はん者にはその嗤ふに任す)

天公本知我。(天公本より我を知る)

不覓他人知。(他人の知るを覓めず)

「謗る者は、お前がいくらでも謗つてもいい。嗤う者は、いくらお前が嗤つてもかまわない。天公は本より我を知る」

と。これはホセア書の内容と非常にぴったりだね。「天公」というのは神さまのこと、天のこと。中国では絶対的存在者を「天」と言います。その言葉を象山は使った。象山という



のは素晴らしい漢学者だから、普通の漢学者はかなわないですよ。当代第一と言ってもいい。
「てんこうもと天公本より我を知る」

と。神さまはもとより私を知っていらつしやる。他の人たちが自分を知ることなんか求めません。神さまが知っていれば、それでもういいんですと。象山は幕末の大先覚者です。もう、どう扱われようが、どう思われようが、痛くも痒くもないと、こういう話です。

●地獄は当然のところ

²²もし神、怒をあらわしちから権力を示さんと思しおぼつつも、なお大なる寛容をもて、
ほろび滅亡に備れる怒の器を忍び、

パウロもその先のことを考えている。ということは、イスラエルの民はこんなに頑固な
んだけど、それでもなお最後には救おうとしていらつしやるわけなんだが、もしそこ
までの、最後に悔改めをしなかったら、イスラエルはダメだ。

「イスラエルの救われんためには、自分はキリストに呪われても」

と、「アナテマ」と、言ったのがこれでしょうが。パウロはそれだけ本当の愛国者だったわ
けです。愛民族家であつた。自分が大きな間違いをしたから、非常に切実に彼は思っていた。
お前たちの頑固なのは、本当は私が一番の首魁しゅかいであつた。それがこういうようになったん
だから、お前たちも変わつたらいいではないかと。

「我キリストに在りて真をいまことい虚偽を言わず、²我に大なる憂あることと心
に絶えざる痛あることとを我が良心も聖霊によりて証あかしす。³もし我が兄弟わ
が骨肉の為にならんには、我みずから詛のろわれてキリストに棄てらるるも亦ね
がう所なり。」(ロマ9:1～3)

9章の始めの三節は切々たるものです。

²³また栄光のために預あらかじめ備え給いし憐憫の器に對むかいて、その栄光の富を示
さんと為給いしならば如何に。

その選びの器は今こうやって頑固で神さまに背いているお前たちだが、やがてその期ときが来
たらどうしてくれるんだと、パウロは先を見ているんです。

²⁴この憐憫の器は我等にしてユダヤ人の中よりのみならず、異邦人の中より
も召し給いしものなり。

ユダヤ人の中にも改宗した人が少しあります。今も少しずつある。けれども、大方はダメ。
けれども、逆に異邦人の中にたくさんある。要するに、神さまの憐憫は絶対無条件に一番
深い意味においてはあるんだと。

「神はその憐まんと欲する者を憐み、その頑固にせんと欲する者を頑固にする」

というのは、一つの時機的な問題なんです。憐れまれたからいい、頑固にされたから悪い
というのではない。頑固にされて捨て鉢になつてもいかにし、憐れまれていると言ってい



い気になってもいいかん。憐れまれていい気になつたら、ご利益宗教になるよ。だから、もう一つ超えると、神さまの憐れみであろうが、神さまに愛されてようが、憎まれようが、それは、

「神さま。どっちも私は信用しませんよ。あなたが一番深いところだけ見てますよ」と。それくらい図太い信仰を持たなくてはダメですよ。こんなことは普通のキリスト教では言えない。

「神さまは神さまであればいい。私の側はどうでもいい。地獄に落ちてもいいんです」

と。本当はそこまでゆくと、神さまの方では地獄に落とさないんだ。これは親鸞の『歎異抄』の中にその境地が出てきている。親鸞というのは凄いです。「地獄は当然のところだ」なんて言っている。

神を信する、キリストを信するとは、徹底的に向こう側に自分を託することです。

「こちらはどうなつてもよろしい」

と。そうすると、「どうなつてもよろしい」ところの騒ぎではない。えらいことになって来る。パウロのこういう言葉は非常にドラマチックになっています。パウロも言いながら、しようがないなと思っている。彼は本当に御霊の人だから、ある意味においては、言えば言うほどずれてしまう。だから、時々絶叫したくなつてしまうんだよ。

●恵みの選び

今日のところはそこまでです。そこで、最後に一つ引用したいものはヒルティです。ヒルティの『眠られぬ夜のために』(第一部)の「2月7日」、実は私の誕生日のところですよ。

「正道にあることのみが、本来的に問題で、その他のすべてはおのずから生じてくる」とある著述家が言っているのは正当である。

またこう言つこともできる。すなわち、福音書が聖霊と名づける霊を自分の生活に獲得することのみが重要である。そつすれば、この霊がそれからのいっさいをなす、と。

私はヒルティのこの言葉が大好きだ。

しからばさらにまた進んでこう言つことができる。聖書のほか、いっさいの宗教書をしばらく閉じよ。しかもこの聖書においてすらも、キリストの言行のほか、いっさいを捨ておけ。その他のものは恵みに必要でない。ときには有用な援助か、刺激となることはあるが。

断固としてヒルティはキリストにだけ、福音書の――マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ福音書の――キリストの言行だけにつつ込んで行け。私がしょっちゅう言っている通りです。

福音が働くひとびとにのみかに全的に作用するものであるかは、注目に価することである。働くひとにとって、それは自分の道における不断の清涼剤である。ところが



閑人は、聖職者もまたそうであるが、
いわゆる坊さんもそうだが、

たえずおこなわれる会合とか、祭儀とか、さまざまな種類の外的教会行事などのよい
いなことが必要になってくる。しかしそのようなものは、働くひとにはさしあたりま
ったく不要である。」

と。本当に働くことにおいて福音が身につくことが大事だということを言おうとしている。

恵みの選び

あなたよ、みわざのためにわたしを

永遠より選んでくださった者よ、

その確認のため、力を与えてください。

わたしに実行力と心がまえあらしめてください。

あなたの求めを敢行することを教えてください。

あなたのみわざを全的に偉大になしてください。

ただ信仰にあつてのみにないえます、

こんなにも美しく重い運命は。」

そういうことで、皆さんも、そのようにして選ばれています。上から来る力を、ヒルティ
が言っている通り、祈り求めて大いにやってください。

「ただ信仰というのは受けとることにあつてのみ担い得る、かくも美わしい天運^{さだめ}」

と。永遠から選んでくれる。力が来る。それで、皆さんも元氣をもらってやってくださいよ。

